

医療維新

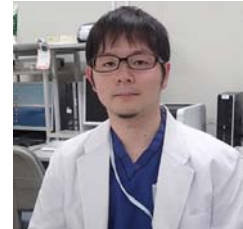
シリーズ 「医学部卒業後10-15年目の医師たち」～JCHO編～



医学部再受験、有機化学の研究者から転身

ブラック・ジャックに登場「権茸先生」に憧れ

オピニオン 2019年2月9日(土)配信 JCHO札幌北辰病院 研修医 尾崎 孝爾

尾崎 孝爾 Takashi Ozaki
JCHO札幌北辰病院 研修医1年目

【略歴】広島県出身。東京大学薬学部薬科学科卒業、東京大学大学院薬学系研究科卒業、大学院在籍中に理化学研究所（和光研究所）、イギリス University of Cambridge (Department of Chemistry) 勤務・留学。その後、2013年に北海道大学医学部に編入し2018年3月卒業。同4月からJCHO札幌北辰病院で臨床研修中。

手術室の扉を開け、入り口をくぐる。

目の前には、青いドレープと銀色に輝く無数の手術器具が所狭しと広がっている。

手術開始。

「キン」

音を立てながら金属製の器具たちはこなれた動きで、術者の手元に来ては戻りを繰り返す。

その律動的な動きは、まるで圧倒的かつ高級な芸術か何かを見ているよう。

動作が繰り返されるたびに術野は深く色とりどりに開かれ、病変部に到達。

あっという間の時間――。

これは、初期研修中の私が外科研修初日の体験を振り返った純粋な感想です。手術室というのは、およそ万人が到達することすらできない禁制の空間です。“外科の巨人”たちのみが入ることを許されたその場に、招待されたかのような錯覚を感じたことを私は今でも忘れられません。

研究者から一転

私は初期研修医として少々特異な経歴を持っているかもしれません。以前は東京の大学院で有機化学の研究に従事していましたが、その後、心機一転、北海道大学医学部を再受験したのです。東京の大学院時代は理化学研究所にいたこともあり、確かに毎日が研究に没頭できる素晴らしい環境でしたが、同時に、創造性の高さを自らに求めた結果、悩むことが多く、自分の人生の意義を考え直す機会となりました。私が医師を目指すきっかけとなった理由、それは自分の心の持つ弱さを自覚し、同じように悩んでいる人たちの役に立ちたいと考えたからです。

こうした背景の中、私は医学生時代には精神科や心療内科に興味を持つようになりました。JCHO札幌北辰病院には確かに精神科や心療内科はありません。しかしながら、どのような診療科を志したとしても初期研修医時代は多くの科で多くのロジックを学ぶに越したことはないと思います。私は研修医として、上級医の背中を見て学ぶことが理論や知識の習得と関係があると思います。当院は、しっかりと学んだことが臨床現場でoutputできる素晴らしい病院と考えております。

当院での研修は、学生時代に教わらなかったことの連続であり、私にとって一つ一つがかけがえのないものです。研修を受けている中で多くの出会いがあり、多くの感情に触れることもできました。学生時代には「研修医というものは、国家試験でパスした時のような医学的知識を行使して患者さんに治癒・軽快をもたらしめるもの」と思っていました。当然のことながら、これは正解ではありません。病院に来られる患者さんは、医学部の学生仲間とは異なり、色々な場所で生まれ、多様な価値観を持っていらっしゃると思います。しかるに、医療現場は均一ではなく、患者さん

の思いに触れることが日々の刺激となっております。時には自身の拙さから周囲に迷惑をかけてしまい、患者さんからも不信感を抱かれてしまったことも多かったと思います。

またメディカルスタッフの方々の期待する最低限のレベルにさえ到達しなかったこともあったかと思います。こうした中で、周囲との信頼関係というものは一つ一つの仕事の積み重ねであり、時間をかけていくことが大事なのだと思ってきました。当院の研修ではメディカルスタッフや患者さんとの距離も近く研修を受けることができるため、人間関係についても気付くことが多いのです。

このように、当院での研修を経て、私は多くの理論と経験を積むことができております。学生時代には全く希望することさえ控えていた診療科での研修など、思いのほか大変充実しており、選択して良かったと思っております。一期一会という言葉がありますが、指導いただいた先生との巡り合わせが良かったということなのだと思えます。

私が初めて研修したのは循環器内科です。生まれたてのヒヨコのような私は、懐の深い循環器内科で医師としての基本的な心構えを学びました。聴診器の使い方や心電図の見方、一つ一つに衝撃を受けました。患者さんを診察する時から手技を施行する時まで、あらゆる場面における必要な心構えはどのような科でも通じるものであると思えました。

小児科研修では新たな発見がありました。自分では気がつかなかったことですが、私は子どもと親和性があるようだと言われました。子どもはやがて大人に成長しますが、不思議なことに子どもは大人とは全く違います。子どもの回復力や成長を見るのはとても楽しかったです。研修期間中に児童精神医学にも触れることが出来たため、新たに興味の裾野が広がりました。

「六等星の男」に魅せられて

外科は冒頭のようにとても鮮烈な印象で覚えています。初めての周術期管理では、手術を受けた患者さんの状態が日を追うごとに変化し、レントゲン写真や採血データなど、手術を受ける前後でここまで大きく変わっていくのかと驚きました。研修医の私でも毎朝、腹部の触診をすることに大事な意味を見出しました。自分が縫合した部位や創部は気になって仕方がないため、必ず毎朝確認しました。

私は駆け出しのため、将来を語ることはできませんが、自分に相応しい奉職を得ることができれば幸いと考えております。手塚治虫氏の「ブラック・ジャック」という漫画の中で「六等星の男」という回があります。有名病院で高い医療技術を持つにもかかわらず、ヒラの医局員であるという椎茸先生なる医師が登場します。ブラック・ジャックは彼に好感を持ちますが、大病院の中では政治や人付き合いが出来ない医師が一等星のように輝くのに対して、椎茸先生は六等星のようだという喩え話がなされます。私も椎茸先生のような人物に憧れがあります。



外科研修時の様子

これから研修病院を選ぶ方々に助言をするとすれば、10年後に1つか2つだけでもいいから覚え続けていくことのできるメッセージがもらえる病院にすべきでしょう。そのためには横着せずに自分に素直になり、できること、できないことを考えた上で病院選びをされると良いかと存じます。もちろん、当院の見学もご検討いただければ幸いです。

シリーズ 「医学部卒後10-15年目の医師たち」～JCHO編～ ▶